

サロン九条 第 319 回例会 (2018. 10. 9)

テーマ 「 絵本と平和 ― 〈2018 ぎふ平和のつどい〉 を前にして 」

話題提供： 浅井 彰子さん (フリーアナウンサー)

\* 参加者 20 名

憲法改正のボリュームが次第に上がってきているなか、今年も市民による平和を考える場 “ ぎふ平和のつどい ” が来月予定されています。

今年のつどいでは、この間マスコミを通じて流されている「自衛隊を憲法に明記しても、何も変わらない」という主張が果たして本当なのかー この話題を気鋭の憲法学者による記念講演を通じて考える試みが企画されています。

市民による実行委員会が岐阜市の後援を得て進めるこのつどいでは、こうした社会テーマを有権者として正面から受け止める企画とともに、“ 市民参加ステージ ” として広範な市民がステージ参加する群読を通じて平和を考える機会を提供し、市民の市民による市民のための企画として、毎年感動を呼んでいます。

今回のサロン九条では、その市民群読の企画・指導にあたってこられている、フリーアナウンサーの浅井彰子さんから、絵本の朗読を含めて話題提供していただきました。

はじめに浅井さんは、今回市民群読される絵本『チロヌップのきつね』の作者である高橋宏幸氏の経歴とその活動を紹介され、高橋氏が実際に千島で経験された一戦争と動物の傷跡―を伝えられました。

その後、この日、浅井さんに同行されてこられた群読参加の主要メンバーの方々により、一足先に市民群読がその場で披露されました。6月から練習されてきた成果もあって、北の海に浮かぶ小さな島 “チロヌップ “でおこる戦争を背景とした老夫婦ときつねの家族、そして美しい花の絵本物語が、その情景が浮かぶように展開し、絵本の持つしなやかさにくわえて、力強さを感じました。

続いて浅井さんは、二冊目の絵本『チロヌップのにじ』を朗読されました。北方の島々は、本来は行き来のできた、対立のない平和な島であり、作者高橋氏は自身が兵隊として体験した戦時下の千島をそこに住む動物を通して、花や虹を描きながら訴えようとしてきたことを語られました。

浅井さんはさらに、平和を考える絵本として『花になった子うし』、『ぼくがラーメンたべているとき』、『せかいいち うつくしい ぼくの村』、そして三匹の子豚の話のパロディと言える『3びきのかわいいオオカミ』を続けて朗読され、絵本の世界のすばらしさを存分に紹介されました。

最後の絵本は、「かわいいオオカミが建てたレンガの家を豚がハンマーで壊し」、「コンクリートの家を豚がドリルで破壊し」、「鉄板の家を豚がダイナマイトで吹き飛ばし」だが、最後に「花で作った家に対しては、そのいい匂いで豚も踊りだしてしまい、かわいいオオカミとも仲良しになってしまう」というストーリーでした。この話は、防備を強くすることは攻撃も強くしてしまい、守り切れなくなるので、結局は無防備が安全につながるということになり、ここに憲法九条や人にやさしいまちづくりの視点があることの指摘があったことは、さらに絵本の意味と力を実感させられました。

その後の話し合いでは、参加者互いに絵本があった環境、なかった環境での思いが語られ、さらに、絵本を子どもたちに読んであげることができたり、自由に議論できるのは平和が基礎であること、また絵本に描かれる絵にやさしさがあることなど、絵本に対する思いが参加者全員からさまざま話されました。

今回は、11月の平和群読本番を前に、〈絵本と平和〉について考え、絵本がその独自の表現を通して、戦争の悲惨さや理不尽さを深く訴えるものを感じ取る場となりました。さらには、平和群読が広範な市民のステージ参加の場を提供することによって、見る側から表現する側に入っていく動きを伴うところにも絵本とともに平和への力となっていくのではないのでしょうか。(近藤)